

創立150周年記念誌

共ニ高キ



令和 5 年 (2023) 10 月



新潟市立中野山小学校



初代校長及び地域と縁の深い先生を中心にして

(1) 窪田茂遂（くぼたもすい）：文化14（1817）年～明治10（1877）年

当校の初代の校長先生である。

経歴については、およそ明治まで ①は、「米沢市史編集資料 第12号 続・米沢人国記」における松野良寅氏の執筆箇所を編者で適宜補充引用し、明治以後 ②は、橋本晴夫氏の調査結果を元にした、「共同研究 ロシアと日本 第2集」（新潟県立大学図書館蔵）の沢田和彦「窪田茂遂『長崎日記』について」の論文から、抜粋引用した。

というのは、松野氏の執筆箇所からは、明治5年10月までの茂遂先生の履歴が記載されているが、以後については、松野氏の関係する他の著作においても全く触れられていないからで、明治以後の茂遂先生の行動を知るには、橋本氏の調査結果を元にした沢田論文の参照が必須であるからである。

その後、両氏の執筆部分のそれぞれについて、編者が注 ③を入れるという形で構成している。

① およそ明治まで

窪田茂遂は、1817（文化14）年に米沢藩士・窪田半四郎茂承（もちつぐ）の長男に生まれ、通称宮蔵（注1）のち源右衛門と改め、号を梨溪（りけい）（注2）と言った。博学奇才、甘糟継成（つぐしげ）（注3）、宮島誠一郎（注4）らと共に、山田夔堂（かくどう）（注5）を師として修学、更に江戸に出て片山弦斎（一貫）（注6）と共に古賀塾（注7）において古賀謹一郎（茶溪さけい）（注8）に師事している。弘化3（1846）年家督を継ぎ（注9）、与板組（注10）に入った。

嘉永6（1853）年6月ペリー浦賀に来航。翌7月プチャーチンの率いる四隻のロシア艦隊が長崎に来航し通商を求めた折、古賀茶溪は勘定奉行兼海防掛の川路聖謨（としあきら）（注11）と共に長崎に赴き、ロシア使節の面接に当り、ロシア側の国書に対する返書をまとめているが、窪田は片山と共に古賀茶溪らに随行して長崎へ行き、使節接遇の補助役をつとめている。茶溪はその後、来航外国人の応待や外交文書起草等の任に当り、安政2（1855）年に洋学所が設立されるや、その頭取に就任している。窪田の著書の中には「長崎接遇日記」（注12）があり、古賀茶溪に随遊した当時の状況がしるされており、窪田の国際的な関心の程度も、その蔵書目録（注13）と関連して推察することが出来る。

江戸勤学を終え帰国した窪田は、安政4（1857）年藩校興讓館（注14）の助教となる。元治2（1865）年興讓館提学（注15）に就任。慶応3（1867）年窪田に代って片山弦斎が提学に就任。慶応4（1868）年戊辰戦争が伸展、奥羽米沢藩が奥羽越列藩同盟の主動となる。同年9月米沢藩降服（注16）。明治2（1869）年興讓館教育再開。戦中・戦後を通し、提学の片山弦斎は国事に奔走し多忙を極めたため、学事は浅間彰と窪田茂遂が掌っていた。明治5（1872）年10月学制改革による興讓館廃止まで、漢学の教授の任についていた（注17）。

② 明治以後について

この頃、なぜか窪田は興讓館の職を辞して、越後へ私塾の教師として赴任することとなる（注18）。即ち、一説によれば文久・元治（1861-65年）の頃、中蒲原郡大形村松崎の名主・川崎祐次郎に招かれてかの地に漢学塾を開き（注19）、また1893（明治6）年5月に同郡の、現在の新潟市立中野山小学校の前身にあたる塾に初代校長として他の米沢藩士二名と共に就職しているのである（注20）。翌年3月に己千舎（きせんしゃ）（注21）という、中蒲原郡の、現在の女池小学校の前身にあたる塾が創立されると、彼は月に三度、五の日ごとに招かれて修身の講義を行っている。窪田の揮した「己千舎」の額が、現在同校の校長室に掲げられている。1876（明治9）年に松崎校が創設されると（注22）、窪田は閉塾し、米沢に帰郷した（注23）。

詩人としての窪田は、宮島誠一郎や雲井龍雄（注24）のような詩人の養成に天賦の才を発揮し、「三餘堂詩鈔」



(注25)、等の作品を残している(注26)。1877(明治10)年3月29日没。行年61歳。菩提寺は米沢市内の曹洞宗禅透院。

③ 注について

・注1：窪田茂遂の自著「長崎日記」でも自身のことを、窪田宮蔵と表記している。また、古賀謹一郎の「西使日記」や片山仁一郎の「従征日記」でも同様の表記だが、片山の書では窪田は「字逢辰」とも付記している。窪田の著「三餘堂詩鈔」(天保9年から明治5年までの189首を所収)では「梨溪 窪田茂遂逢辰著」とある。さらに、東洋文庫「柴田収蔵日記2」所収の「江戸日記」では、師の古賀謹一郎のことは古賀(先生)の名で頻出するのは当然として、窪田の表記も多数箇所で見出される。「窪田宮蔵過訪」の記載もある。古賀塾で柴田と茂遂先生は親しく、新發田収蔵「萬國地名捷覽」(1853年春草堂発行)の序を窪田茂遂の名前で寄せている。柴田収蔵は佐渡の宿根木出身。



・注2：梨溪の号は、師の古賀謹一郎の号、茶溪にあやかっただのであろう。梨溪の書の腕前は、注1の「三餘堂詩鈔」の題簽や前記②の「己千舎」の校額でわかる。

・注3：甘糟継成：天保3(1832)年～明治2(1869)年

先祖は上杉謙信時代からの重臣の家柄である。幼少から神童と呼ばれ藩校興讓館で学ぶ。奥羽越列藩同盟の参謀として、河井継之助と人生が重なる。戊辰戦争後勝海舟と面談等、「米沢市史編集資料 第10号 米澤人國記」p193～p198に詳しい。著書は「鷹山公偉蹟録」。その序文を窪田茂遂が慶応二年九月付けで寄せている。

・注4：宮島誠一郎：天保9(1838)年～明治44(1911)年

米沢藩士。興讓館に学ぶ。幕末では勝海舟に相談を仰ぐなど奥羽越列藩同盟での中心人物。宮島の著書「戊辰日記」(米沢市史編集資料第28号)では、「窪田先生」とあったり、自身の詩稿を窪田茂遂から点評して頂いていた。友田昌宏「戊辰雪冤」(講談社新書)に詳しい。

・注5：山田螻堂の名字の読み方は、「米沢市史編集資料 第10号 米澤人國記」での執筆者、松野良寅氏の示す「ようだ」が正しいと思われる。デジタル版日本人名大辞典では「やまだ」であるが、市立米沢図書館の分類は松野氏と同じ読み方である。享和3(1803)年～文久元(1861)年。父の山田政章は、興讓館総監という立場であったが、息子螻堂は大の読書嫌い。しかし、悟るところあって読書三昧に転じ、江戸に上り、古賀侗庵(古賀精里の三男で古賀茶溪の父)の門下に入り学ぶ。螻堂の私塾・杜宇山荘には、他に中川雪堂、雲井龍雄など、多くの俊秀が集まった。(以上は、前出松野氏の執筆箇所よりの抜粋である)。編者は、茂遂先生は師・山田螻堂から読書の大切さを学び、それが、中野山小学校の最初の校名・開益舎につながったのだろう、と推測している。そして、螻堂の師・古賀侗庵の息子・古賀茶溪を、自身と僅か一歳しか変わらないけれども、伝統的な儒学に囚われず、洋学への関心が高く、人物にも魅力を感じてご自分の師とされたのだろう、とも推測する。

・注6：片山弦斎は米沢藩士。文政8(1825)年～明治35(1911)年。窪田茂遂と古賀塾に学び、師の古賀謹一郎が長崎に赴いた際の随員の一人。慶応3(1867)年興讓館の提学(校長)。父一貞も興讓館提学であった。字は一貫。通称・仁一郎。(以上、米沢市史編集資料第14号「長崎日記」p26、「レファレンス協同データベース」より抜粋)。なお、片山仁一郎の「従征日記」には、「安政戊午正月(安政5年・1858年)」付けて「茶溪増」の名で、古賀謹一郎が「弁言」を寄せている。



・注7：父・古賀侗庵より家塾を引き継いだ古賀謹一郎の塾を久敬舎（きゅうけいしゃ）という。河井継之助や鈴木無隠等もここで学んだ。なお継之助は、その生涯で三度も久敬舎に入塾している（「塵壺 河井継之助日記」東洋文庫巻末の河井継之助略年譜より）。

・注8：古賀謹一郎〔文化13（1816）年～明治17（1884）年〕

（1）紹介

一言で言えば、「＜東京大学＞をつくった男」である（小野寺龍太「古賀謹一郎」ミネルヴァ日本評伝選の帯文を引用）。下記の「」の紹介文は、同書のカバーの袖部に掲載された文を引用した。

「名門の儒者であり洋学者。ペリー来航後、圧倒的な攘夷の風潮の中で敢然として開国を主張、貿易による富国強兵策を提言した。また東京大学の前身である洋学校蕃書調所を創設し、万民に開かれた近代的経営を行った。維新後、新政府から大学大博士として召されたが、薩長政府に仕える事を潔しとせず、市井の一老人として生涯を終えた。」

（2）古賀謹一郎をめぐる人々

① 古賀精里：寛延3（1750）年～文化14（1817）年

姓は劉。氏が古賀。名は樸（ぼく）。尾藤二洲、柴野栗山の二人を加え「寛政の三博士」とも言われた昌平黌の教官。佐賀藩の藩校弘道館の設立に関わる。ロシアとの交易を主張。息子に長男の古賀穀堂、三男の侗庵。孫に古賀謹一郎。

② 古賀穀堂：安永6（1778）年～天保7（1836）年

昌平黌に学んだ後、佐賀に戻り、藩校弘道館の教授となる。早くから儒学以外に医学や蘭学の必要性を、藩主鍋島直正に説いた。藩政改革では、教育予算を従来の数倍も増額させた。

③ 古賀侗庵：天明8（1788）年～弘化4（1847）年

昌平黌の教授。開国による積極的交易論者。門下に安積良斎、佐久間象山（その門下に小林虎三郎）等がいる。その中でも、日本赤十字社の生みの親である佐野常民がいる。佐野は佐賀の弘道館で学んだ後、天保8（1837）年江戸で侗庵に学ぶ。嘉永元（1848）年緒方洪庵の適塾、さらに華岡青洲に入門している。当校の校歌の作詞者、手塚義明の晩年との縁も感じる。

④ 堀達之助：文政6（1823）年～明治27（1894）年

嘉永6（1853）年ペリーの黒船来航の際の通訳である。日米和親条約の翻訳に関与。安政2（1855）年ドイツとの条約交渉を独断で処理しようとしたとの嫌疑で入牢。吉田松陰と獄中で交流。安政6（1859）年、松陰処刑の2日後、堀の才能を惜しんだ古賀謹一郎の尽力で出獄。蕃書調所で翻訳にあたり、文久2（1862）年、「官板バタバヤ新聞」という日本で最初の日本語新聞を発行した。同年には、「英和对訳袖珍辞書」という日本で最初の英和辞典を編纂した。収録語数3万。発行部数200部。

⑤ 緒方洪庵：文化7（1810）年～文久3（1863）年

医師、蘭学者。大阪に適塾（大阪大学の前身）を開き、福澤諭吉、橋本左内、大村益次郎、手塚良仙、佐野常民など多くの人を育てた。古賀謹一郎と伊東玄朴の推挙で奥医師、西洋医学所頭取として江戸に出仕。天然痘治療に貢献した日本近代医学の祖と言われる。緒方洪庵の墓碑は慶応3（1867）年建立されたが、その「墓誌」及び「銘」は、漢文で古賀謹一郎の撰である。



⑥ 高橋竹之介：天保13（1842）年～明治42（1909）年

長岡市の杉之森で生まれる。与板の塾で学び、文久2（1862）年長善館に学ぶ。尊皇攘夷運動家。慶応2（1866）年古賀謹一郎に学ぶ。東京遷都反対運動で謹慎、明治3（1870）年投獄。明治12（1879）年出獄後、明治16（1883）年長岡に誠意塾を開く。弟子約600人。明治30（1897）年、山縣有朋、松方正義に北越治水対策の根本的対策として、大河津分水路建設の必要性を説いた建言書を提出した（第二回燕大学「高橋竹之介と北越治水策」の公開PDFより抜粋引用）。

因みに、大河津分水路は、内村鑑三と札幌農学校で同期だった広井勇、その弟子の青山士（パナマ運河建設に携わった唯一の日本人）が、新潟土木出張所長として、宮本武之輔とともに改修の指揮をして現在の可動堰がある。なお、広井勇は、同い年の牧野富太郎と土佐の名教館（めいこうかん）で共に学んだ間柄である。

また、内村と同期に新渡戸稲造。青山士は、内村の「後世への最大遺物」が入信のきっかけであるという（高崎哲郎「評伝 技師青山士」p45による）。

⑦ 小栗忠順（おぐりただまさ）：文政10（1827）年～慶応4（1868）年

「幕臣。父は新潟奉行小栗忠高。安政6（1859）年目付となり、翌万延元（1860）年日米修好通商条約批准書交換使節の一員として渡米した。帰国後は勘定奉行、軍艦奉行等を務め、横須賀製鉄所建設、関税率改訂交渉、軍制改革などの任にあたり、動乱期の困難な幕府財政を支えた。戊辰戦争に際し強硬な抗戦論を主張して罷免され、所領地の上州群馬郡権田村に隠棲したが、新政府軍により捕縛、処刑された。」（国立国会図書館の電子展示会「近代日本人の肖像」を引用）

「小栗上野介日記」（群馬県史料集 第七巻 小栗日記）では、古賀謹一郎、或いは古賀筑後守の名で古賀との交流の旨が頻繁に表出している。

・注9：弘化3 11月に、窪田源右衛門の名で家督相続する。125石。提学。（米沢市史編集資料第6号 慶応元年分限帳p25による）。

・注10：与板衆（組）は、直江兼統家「代々の家臣を中心に他国出身者や寺院などで構成され、与板をはじめ、三島・和島・寺泊などに拠点を持っていた」（新潟県長岡市のHPより引用）。

・注11：勘定奉行兼海防掛の川路聖謨（1801～1868）と大目付筒井政憲が幕府側の実質的全権。通訳として箕作阮甫（孫が箕作麟祥）、儒者古賀謹一郎の4人が、ロシア全権プチャーチン等の応接係（全権委員）として派遣された。

・注12：窪田茂遂の「長崎日記」（嘉永7年＝1854年成立）は、米沢市史編集資料第14号で刊行された。「古賀に随行し、長崎までの紀行文（上巻）、長崎での交渉の様子（中巻）、長崎から米沢までの紀行文（下巻）を収める」（市立米沢図書館デジタルライブラリーより引用。自筆原本と下巻は写本でも、デジタルで公開されている。なお、原本は、「長崎日記」であり、「長崎接遇日記」ではない）。

ただ、川路聖謨にも同名の「長崎日記」があり、これは東洋文庫で刊行されている。

ロシア側から見た会談の様子は、ゴンチャロフ「日本渡航記」（岩波文庫・井上満訳）p261以下参照（その中でも森山栄之助の存在は大きい）。

・注13：梨花溪居蔵書目録（窪田茂遂の蔵書目録）では、「海防図識」、「米利堅合衆国考」、「坤輿形勢略乗」、「漂客談奇」等々、洋学研究に専心していた師・古賀謹一郎の影響が反映している（以上、米沢市史編集資料第14号の松野良寅氏の解説から要約して引用した）。



・注14：興讓館の歴史は、直江兼統の元和4（1618）年の学問所禅林文庫成立から始まる。何より、米沢藩第9代藩主上杉治憲（後の鷹山）の師細井平洲が、安永5（1776）年に、興讓館と命名し藩校として再興したことが、その後の歴史的意義を考えると大きなことであった。

「大学」の一節「一家仁一国興仁、一家讓一国興讓」を校名の由来としている。細井平洲の著「嚶鳴館遺草（おうめいかんいそう）」は、吉田松陰や西郷隆盛にも大きな影響を与えたと言われている（東海市立平洲記念館のHPより引用）。ただ、平洲は現在でも、公立の東海市立平洲小学校や東海市立平洲中学校と、校名にまで名前が入るほどに、出身地を中心に慕われている人物である。因みに、この一節は、多くの二宮金次郎像で、金次郎が開いている本に刻まれた箇所でもある。なお、鷹山も西郷も尊徳も、内村鑑三「代表的日本人」で取り上げられている。

・注15：提学（ていがく）は、「一人ないし二人を置く。督学・総裁共に空席のときは、学館を総裁する。」（「興讓館世紀」p115.山形県立米沢興讓館高等学校創立百年記念事業実行委員会発行）。松野良寅氏の米沢市史編集資料第14号での注では、「提学（校長）」とある。

・注16：新潟県立新潟高等学校前の戊辰公園に、「色部長門君追念碑」が建碑されている。当校近くでは、木戸病院の隣のはなみずきさくら公園内に、「戊辰の役 祈念の碑」が建碑されている。色部長門（1826-1868）は、興讓館で学んでいる。戊辰戦争の際、新発田藩は新政府軍に内応し、農兵隊を組織した。その中には、「女池の新田半人らが農兵として藩の銃隊などに参加している」（「新潟市合併町村の歴史 第4巻」p156より引用）。戦後、新田半人からの講義等の依頼を、窪田茂遂先生のお気持ちとして、どのように受け止められたのかを編者は想像する。

・注17：「明治4年1月興讓館内に、洋学舎を創設。同年11月米沢県を廃止、置賜県が置かれる。以後県費と上杉家の資金で興讓館を維持し、窪田茂遂が総頭に任じられた」とある（高梨健吉「英学ことはじめ」p221より要約して引用した）。

・注18：まず、第一に、沢田論文の「この頃」とは、興讓館が廃止された明治5年10月以前のことであろうか。平成2（1990）年発表のこの沢田論文では、記載の通り、「この頃、なぜか窪田は興讓館の職を辞して」とある。だが、この論文を収録した、平成26（2014）年刊行の沢田和彦「日露交流都市物語」p86では、「なぜか」の3字が消えている。興讓館廃止の前に職を辞したのかどうか、不明な点である。

第二に、「私塾の教師」の「私塾」とは、川崎祐次郎の関係する「漢学塾」なのか、当校の「前身にあたる塾」のことか、さらには、女池小学校の「前身にあたる塾」も含めての「私塾」という趣旨なのかは不明である。

・注19：まず第一に、「文久・元治の頃」の話なのだから、「中蒲原郡大形村」の表記は不適切であろう。第二に、「松崎の名主・川崎祐次郎に招かれて」の旨は、「中蒲原郡誌 下巻」の中の「大形村誌」p530に掲載されているが、この話のそもそもの根拠は不明である。ただ、川崎祐次郎の名は、「新潟市合併町村の歴史第3巻」p270で、「松崎村の名主名」で明治5年の欄に載っている実在の名主ではあった。

・注20：他の藩士二名とは、夏井範訓と小田切泰三である。窪田茂遂先生のお弟子であろうことは容易に想像がつく。編者は、米沢興讓館同窓会に、（1）窪田茂遂（梨溪）の肖像か写真の所蔵の有無と（2）この二名について問い合わせをしたが、いずれも不明であった。しかし、同会から、市立米沢図書館の郷土資料担当者に調査依頼をして頂いた。以下はその回答の要約である。



(1) についてはやはり、所蔵無しとのこと。

(2) 夏井範訓、小田切泰三の名前の記載のある資料は無いようです。両名とも米沢藩士とのことから、「慶応元年分限帳」を確認したところ、小田切姓の藩士は7名、夏井姓の藩士は4名記載がありました関係は不明です。夏井姓では「上杉家御年譜」二十三卷所収の「御家中諸士略系譜」p468-470に、夏井玄蕃重範から連なる米沢藩士の系譜が記載されています。ここから、この家系では実名(諱)に「範」を付けることが多かったことが分かります。名前に共通点があることから、この家系との関係がある可能性が高いと推察されます。とのことだった。

・注21:「中庸」第二十章を出典とする、という。「己」(自分)は「之」(中々できそうもないこと)を「千」回でも繰り返してできるようにする、という趣旨とのこと。この教えが現在の女池小学校の教育目標や重点目標に繋がっている、という(女池小学校のHPより趣旨を引用)。最初の校名の教えが、現在の女池小学校に大切に伝わっている。その上での創立150周年であることに、編者は敬意を表します。

・注22:この箇所も、「中蒲原郡誌 下巻」の「大形村誌」p530の記述によると思われる。しかし、そこでの「明治9年松崎小学校創設せらるゝに及びて」の記述が、様々な混乱を産むことになった。松崎小学校は、明治9年5月創設の「松崎校」のことである。現在の新潟市立大形小学校の前身である。だから、「大形村誌」の中で記述されている。

しかし、「松崎校」が大形小学校の前身の小学校を指すとすると、以下の記事と全く時間的な齟齬が生じる。女池小学校の前身の「己千舎のおこり」として、「新田半人氏自宅ヲ提供シテ己千校ヲ興シ、松崎校ニ在任セル窪田梨溪ヲ月二三回招聘シテ」(「新潟市義務教育史 明治編」p237)云々したのは、「時ハ明治七年ナリキ」と明記されてある。己千舎の校額には、「明治七年三月梨溪」と揮毫されている(前掲書)。

これは、中蒲原郡誌の「大形村誌」でいう「松崎校」(aとする)と「己千舎のおこり」でいう「松崎校」(bとする)とは同じではない、ということである。ここで、「明治七年新潟県(公立)小学校一覧表」を掲載する「新潟県教育百年史 明治篇」p979では、「松崎校」は、第六中学区第廿三大区小十一区で所在地は「松ヶ崎浜村」とある。ちなみに、濁川校は、第六中学区第廿三大区小一区で、所在地は濁川新田である。海老瀬校は、第一中学区第廿一大区小七区、所在地は海老瀬村である。そもそも中学区が異なるのである。aは、明治9年5月創設であるから、当然にそこには記載されていないのである。

実は、「松ヶ崎浜村」は、1954年までは現在の新潟市の東区と北区に跨った一つの村であった。bでいう「松崎校」とは、現在の北区側にあたる「松ヶ崎浜村」にあった小学校ということになる。つまり、現在の新潟市立松浜小学校のことである、と編者は考えるのである。

なお、松浜小学校は明治5年11月開校。だが、松浜小学校も南浜小学校のいずれも、明治の30年代始めまでの校長先生のお名前は、「新潟市立学校沿革略誌」には載っていない。

以上から、窪田茂遂は、明治6年開益舎開校の翌年には、第二代校長の夏井範訓に任せ、今の松浜小学校の「松崎校」(前述のb)に移っているもの、と編者は考える。

・注23:つまりは、明治9(1876)年に大形小学校の前身の「松崎校」(前注のa)が創設されたことと、窪田茂遂先生の帰郷は直接の因果関係は無い、と編者は推察する。窪田先生は、翌明治10年3月に鬼籍に入られた。帰郷の理由は、健康上の理由であろうと編者は推察している。

・注24:雲井 龍雄(くもいたつお)。天保15(1844)年~明治3(1871)年

米沢藩士。幼少の頃山田螻堂の私塾に入塾。後、興讓館で学んだ俊秀。興讓館の蔵書約3,000冊のほとんどを読破。江戸藩邸に出仕し、昌平齋で安井息軒に学ぶ。戊辰戦争後、脱藩者や旧幕臣の窮状を訴えた嘆願



書を政府に提出。しかし、政府転覆の陰謀と見做され斬首刑に処せられた。享年27才。西田幾多郎も親友山本良吉宛書簡で雲井の墓を訪れた感慨を記している（以上は国立大学法人 福島大学 維新の志士「雲井龍雄」プレス発表資料6による）。

・注25：「三餘堂詩鈔」の「三餘」とは、「読書三余」を踏まえているであろう。

・注26：他に、「西洋行軍鼓譜」（上原寛林編集）を、窪田茂遂は安政2（1855）年に出版している。この書は、「日本の吹奏楽黎明期に関する資料」として貴重な一冊とされる。これは、プチャーチンの長崎来航、応接の際の茂遂先生の体験が影響しているのであろうことは、容易に想像される。編者は、後の当校の全国的な器楽クラブの活躍を思うとき、茂遂先生とのつながりとその「おもい」を感じるのである。

また、「米沢藩医 堀内家文書」からは、堀内家の堀内忠亮宛で文久2（1862）年に窪田茂遂から書状を出している旨、載っている。堀内家は、杉田玄白、大槻玄沢、司馬江漢、大槻俊斎（義兄は手塚良仙＝手塚治虫の曾祖父である）、伊東玄朴（シーボルトの鳴滝塾で学ぶ）、大槻磐溪（子が大槻文彦）などと交流していたことが同書で分かる。

（2）小暮一次（下場出身）

- ・嘉永3年4月 誕生
- ・明治11年1月 公立蔵所小学校首座教員に就任
- ・明治13年6月 病気退職
- ・明治15年3月 中野山校の第4代校長に就任
- ・明治16年2月 退職
- ・明治17年7月19日 開校した新潟校第二分校鏡淵校に勤務
- ・明治18年7月4日 公立西堀小学校訓導（首座教員）に就任
- ・明治19年3月1日 第2代の公立西堀小学校（後の新潟市立大畑小学校）校長に就任
- ・明治19年3月12日 新潟校（現在の新潟市立新潟小学校）の校長心得に就任
- ・明治19年3月 現在の新潟市立鏡淵小学校第4代校長に就任
- ・明治20年2月23日 尋常科新潟小学校校長に転出
- ・明治20年2月23日 初代の尋常科新潟小学校第二分教場（後の新潟市立豊照小学校）校長に就任
- ・明治20年8月 退職
- ・明治25年9月 尋常科石山小学校（当校）の第7代校長に就任
- ・明治33年10月 退職

「訓導小暮一次氏は、明治15年頃より在勤せられ、さらに同25年再任以来、爾来茲に至るまでの本校教育の統理者なりき。真に本校教育上に貢献せらるるもの偉大なりと謂（いっ）つべきなり」と学校沿革史には記載されている。

以下、明治20年前後の小暮氏の活動として数例を挙げる。

・新潟県有志教育会の委員として、同会の大会議題の発題者として同氏の名前が記載されている。

ちなみに、「普通教育ハ学科ノ数ヲ減少シ以テ之ニ精通熟達セシムルト其数ヲ増加シ以テ博通セシムルト其可否如何」との発題である（新潟県有志教育会雑誌 第8号p61 明治19年5月28日発刊）。

・また、新潟県有志教育会雑誌 第13号（明治19年10月28日発刊）では、初等科と稍高等に進んだ場合の試験問題と記憶力との関係などについて、氏の意見がみえる。